商・渡辺達朗教授

子どもへの食品寄贈事業を立案

東京都の事業提案制度に採択

東京都が都内の大学研究者から事業提案を募集し、都の施策に反映させる事業提案制度に、商学部の渡辺達朗教授が立案した「子どもへの食品寄贈事業」が採択された。2023年度から3年間、実施される。

都は、都内の大学に集積されている知を施策に活用することを目的に、大学研究者による事業提案制度を行っており、インターネット投票などで5件が選定され、23年度予算に反映された。

小池百合子都知事（左）と渡辺教授＝2月7日

渡辺教授の提案は、日々の食事に苦労する子どもたちがいる一方で、やむなく捨てられる食品がある現状を鑑み、安心して食品が寄贈できる支援組織のネットワークやルールづくりを行う。具体的には、フードバンクや子ども食堂など寄贈を受ける側と企業や自治体など寄贈する側、双方への調査や実証実験などを行い、食品寄贈に関するガイドラインを策定し、官民連携による食品寄贈に関する認証機関の設置を目指す。

渡辺教授は「それぞれの組織や企業が持っている知見をまとめ、食品寄贈が持続可能な取り組みになるような仕組みやルールを作りたい」と話している。

社会科学研究所 × ベトナム社会科学院東北アジア研究所

MOUを再締結

3月14日、社会科学研究所の大矢根淳所長（人間科学部教授）に、ベトナム社会科学院・東北アジア研究所（VASS／INAS）のチャン・ホアン・ロン所長代理から国際交流組織間協定書（MOU）が手渡された。両研究機関の人的交流や研究交流について定めたものであり、今後の日越両研究機関の緊密な協力が期待される。

ロン所長代理（左）からMOUを受け取る大矢根所長

昨年10月、INASのダン・スアン・タイン副院長ら5人が神田キャンパスを訪問した際、INASと本学社会科学研究所とのMOUの再締結、ならびに日越外交関係樹立50周年を記念した国際シンポジウムの共催についての打診があった。それを受け社会科学研究所は基本合意書をINASに送付していた。

3月14日にはロン所長代理らが神田キャンパスを訪問し、大矢根所長に協定文書を手渡した。

白河から始まる日本語研究

―市と共催 企画展と講演会―

方言や言語調査について語る松木理事長、鈴木市長、丸山教授（右から）、斎藤教授（奥右側）

本学は3月10～12日、福島県白河市と共催で、企画展「岩淵悦太郎収集の貴重古典籍」を白河市図書館「りぶらん」で開催した。国際コミュニケーション学部日本語学科所蔵の貴重古典籍を展示。11日には「白河から始まる日本語研究」と題して講演会とシンポジウムを開催した。校友会福島県連合会、育友会福島（中通り）支部の後援。

岩淵悦太郎（1905～78年）は白河出身の日本語学者。専門は日本語の音の変化の歴史（音韻史）で、関連する膨大な古典籍を残した。

今回の展示では、岩淵が集めた貴重古典籍の中から8点を紹介。このうち奈良時代の古写経には平安時代の読み方の書き入れが行われている。斎藤達哉教授は講演で岩淵の業績と展示資料について紹介。「古典籍の書き込みから、過去の日本語の音が分かる」と解説した。

また、丸山岳彦教授は白河方言の特徴や、岩淵が中心になって行った国立国語研究所による大規模な言語調査「白河調査」（49年）の詳細について語った。丸山教授は「言葉を人間生活の中で行われるものとして捉え、社会での言語生活の実態を初めて明らかにした」と調査の意義を説明した。

続いて行われたシンポジウムでは、同市出身の松木健一理事長、鈴木和夫市長、丸山教授、斎藤教授が白河方言などについて縦横に語った。松木理事長は「言葉の背景には、人々の営み、人間関係の奥深さがある」と語り、鈴木市長は「言葉の数だけ文化がある。地域が育んだ方言こそ、自分たちのアイデンティティーだ」とまとめた。

斎藤達哉教授に吉川博士記念賞

斎藤達哉国際コミュニケーション学部教授が、國學院大學の吉川博士記念賞を受賞した。

同賞は、元國學院大學長で国語審議会委員、角川文化振興財団理事長を務めた、故・吉川泰雄博士の学績を記念し、国語学に関する優秀な研究業績を単著として出版した研究者に贈られるもの。

今回の受賞は、著書『国語仮名表記史の研究』（武蔵野書院、2021年）の中で仮名資料の諸伝本における仮名・漢字の使用状況や、同音異体仮名の位置による使い分けなどを解明しており、文字・表記史の研究の新境地を開いたことが高く評価された。授賞式は、3月20日、國學院大學渋谷キャンパスで行われた。

斎藤教授は日本語の音韻史、文字・表記史が専門。

社会知性開発研究センター／ソーシャル・ウェルビーイング研究拠点

アジアの研究者招き国際シンポジウム

金井教授によるプレゼンテーション

社会知性開発研究センター／ソーシャル・ウェルビーイング研究拠点（研究代表者：嶋根克己人間科学部教授）は2月3～5日、国際シンポジウムを開催した。情報・システム研究機構データサイエンス共同利用基盤施設社会データ構造化センターとの共催。生田キャンパスをメイン会場にハイブリッド形式で実施した。日本、タイ、インドネシア、フィリピン、ベトナム、モンゴル、韓国、台湾の研究者43人が参加した。

3、4日には、同研究拠点の研究計画実施のためのプロジェクト会議が実施された。

5日の公開シンポジウムの第1部では、危機における主体的なレジリエンス（回復力）に関する二つのパイロット調査の報告がなされた。日本・ベトナム合同チームが在日ベトナム人労働者に、インドネシアチームが統合失調症の人とその介護者に焦点を当てた内容となった。

第2部では、日本チームがインタビューデータを使ってプレゼンテーションを行った。

また、パイロット調査時の在日ベトナム人労働者の日本での暮らしぶりを紹介する写真を展示し、参加した研究者たちの関心を集めた。

同研究拠点の金井雅之人間科学部教授は「10年近く続いている国際共同研究において、とりまとめ段階に入りつつある研究テーマと、これから取り組んでいく研究テーマをバランスよく組み合わせた、有意義なシンポジウムになった」と3日間の総括を述べた。

外部評価委員会を開催

2022年度自己点検・評価に関する外部評価委員会が3月14日、生田キャンパスで開かれた。

外部評価委員会は、20年度に「本学における内部質保証システムの客観性及び妥当性の向上を図ること」を目的に設置。毎年度、「自己点検・評価報告書」などに基づき、多様な見地から専修大学の教育・研究・社会貢献活動等について評価を行い「外部評価報告書」として取りまとめている。コロナ禍で書面開催となっていたが22年度は初めて対面で開催された。

委員長の佐々木重人学長は「委員より頂戴した忌憚のない意見を基に、より一層、教育・研究活動や社会貢献活動の充実に努めてまいりたい」と語った。

授与式に出席した5氏と佐々木学長、松木理事長、日髙総長ら

8氏に名誉教授称号

専修大学名誉教授称号記授与式が4月1日、生田キャンパスで行われた。佐々木重人学長、松木健一理事長、日髙義博総長らが列席し、8氏に名誉教授称号記が授与された。

◇　◇

堀江洋文元経済学部教授
白藤博行元法学部教授
渥美幸雄元経営学部教授
中野育男元商学部教授
船木亨元文学部教授
江原淳元ネットワーク情報学部教授
吉田弘道元人間科学部教授
渡部重行元国際コミュニケーション学部教授

就職だより

〈4年次生へ〉就職活動も選考活動が活発になり、いよいよ佳境を迎える頃かと思います。思うように選考に通過しない場合は、キャリア形成支援課の相談を活用して、提出書類や面接の内容を一度見直してみましょう。焦りや不安があると冷静な判断ができなくなります。どんな内容でも構いませんので、ぜひ活用してください。また、引き続き悪質なエージェントや就活塾には注意してください。

〈3年次生へ〉就職ガイダンスを4月21日（金）、22日（土）にオンラインで実施します。内容は「かんたん解説!! 30分で不安解消!! 就活入門」というテーマで、就職活動に必要となる重要な事項を分かりやすく解説します。詳細は、in Campusにてお知らせしますので、必ず確認してください。

川嶋氏に学位授与

3月28日、専修大学から博士の学位が授与された。（氏名に続き、現職、学位の種類、学位請求論文名）

川嶋　正士氏

日本大学工学部・大学院総合社会情報研究科教授、博士（文学）、「5文型の史的研究――統語分析が誕生してから文の公式が提唱されるまで」